女教師 彩花二十四歳

第十一巻　校庭でセクシーポーズ

海老沢　薫　著

内容

■著作権について
■まえがき
■第一章　放課後の校庭で野外プレイ
■海老沢薫ＢＬＯＧ
■海老沢薫Ｗｅｂ連載小説
※海老沢薫ＢＬＯＧ
・・・最新作の出版情報や、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。
https://ebisawakaoru.blog.2nt.com/

■著作権について

「**女教師　彩花二十四歳　第十一巻　校庭で　セクシーポーズ**」（以下本書と表記する）の著作権は【海老沢薫】にあります。

・本書のすべての内容は、日本の著作権法、及び国際条約によって保護されています。

・「海老沢薫」が事前に書面をもって許可した場合を除き、本書の一部、または全部を、あらゆるデータ蓄積手段（印刷物、電子ファイル、ビデオ、テープレコーダー）により複製、流用、転載、転売することを固く禁じます。

・著作権の侵害につきましては、著作権法第119条などの罰則がありますのでご注意ください。

■まえがき

放課後の理科室で黒板に磔にされている姿を複数の生徒達に目撃されてしまった女教師、彩花。

生徒達に甚振られ、新たな支配者として弱みを握られてしまった女教師は、屈辱的な恰好のまま理科室から校舎の外へと連れ出されてしまう。

「お願い、もう許して・・・」

女教師が発する願いの言葉は生徒達に受け入れられることはなく、校庭の隅まで連れて来られた彩花は、そこで生徒達からの屈辱的な要求に従っていく。

放課後の校庭の片隅で、彩花が教師としてだけでなく、一人の女性としてのプライドまで投げ捨てて魅せるセクシーポーズやセクシーダンスに、生徒達は校庭が暗がりに染まるまで酔い痴れた。

「先生それじゃあ、また明日！」

すっかり暗くなった校庭で、女教師を屈辱の姿のまま放置して下校する生徒達。彩花は懸命に生徒達を呼び止めようとするが、ついに放課後の人影のなくなった校庭に一人取り残されてしまう。

やがて、絶体絶命の窮地に怯える女教師の元に近づいて来る足音が聞こえた。彩花は恐怖に体を震わせながら目の前に現れた人影を見ると、それは屈辱に喘ぐ女教師にとって、あまりに意外な人物だったのだ。

■第一章

放課後の校庭で野外プレイ

放課後の理科室から生まれたままの姿で連れ出された女教師の彩花は、体の両側をガッチリと男子生徒達に抑えられてしまい、逃げる事ができなかった。女教師の前を歩く女子生徒達は時折後ろを振り返り、卑猥な体を晒しながら憂いに満ちた表情で歩く哀れな女教師の姿を嘲笑った。

すでに校内のすべての部活動は終わり、生徒達の多くが下校してしまったのか、校舎内にさっきまで響いていた吹奏楽部の演奏も聞こえなくなり、グラウンドから体育会系の部活の生徒達の勇ましい声が響いてくることもなかった。

私、これから何をされるんだろう・・・。

両手首を水着で縛られたまま、まるで罪を犯した囚人かのように薄暗い廊下を歩かされる女教師は、周りを囲む生徒達の企みに怯えた。

そうして階段を降り、一階へと辿り着いた生徒達は、周りに人影がないことを確認すると、素っ裸の女教師を連れてついに校庭へと出たのだった。

「いやぁ、お願い、外に連れて行くのはやめてぇ」

剥き出しの肌に校庭を吹き抜ける風が触れると、野外で素っ裸を晒す事に抵抗を感じた彩花は急に立ち止まり、男子生徒達に掴まれた体を懸命に振り払おうともがいた。

「先生、落ち着いてください！」

「さっき裸で校庭を走っていたくせに、なにを今さら恥ずかしがっているんですか！」

女教師を先導する女子生徒達は、羞恥に怯える女教師を一渇し、体を掴んでいる男子生徒達は腕に力を込めて、暴れる女教師を力づくで抑えた。

「いやぁぁっ」

素っ裸の女教師が懸命に身を捩り抵抗する様は、幼い子供がダダをこねる姿に似ていて、周りにいる生徒達には滑稽に映った。

「先生、いい加減にしなさい！」

いつまでも抵抗を続ける女教師に業を煮やした女子生徒の一人が、厳しい口調で叱責すると、女教師の剥き出しのお尻をピシャッと平手打ちした。

「痛いっ」

彩花は苦痛に顔を歪め、女教師の形の良いムッチリと脂の乗った魅惑的なお尻は真っ赤に晴れ上がり、それを見た生徒達の加虐心を煽った。

「先生、それじゃあこの辺で遊びましょ」

先導する女子生徒達は、人目につきにくい校庭の一角で立ち止まると、男子生徒達に命じて女教師の腕を縛る水着の生地の一端を、そこに植えてある木の枝に縛り付けさせた。

「きゃぁ、何するの？馬鹿なマネは止めてぇ」

新たな羞恥プレイが始まる予感を覚えた彩花は悲鳴を上げたが、それは生徒達にとっては心地よいBGMにしか聞こえなかった。

「先生、とっても素敵な恰好ですよ」

「木元先生はやっぱり縛られる姿がお似合いなのね」

「外で見る彩花ちゃんの裸、最高！」

生徒達は、放課後の校庭の片隅にある木に縛られた女教師の卑猥な体を好奇に満ちた目で見つめながら、優越感に浸っていた。

「お願い、早く解いてぇ」

彩花は裸の体を捩じらせながら生徒達に懇願したが、誰もそれを聞き入れる者などなく、女教師の裸踊りを楽しそうにただ眺めているだけだった。

「先生、とりあえず今から私達が言う通りにしてください。そしたら先生の望みを聞いてあげても良いですよ」

女子生徒の一人が完全な上から目線で女教師を諭した。

それを聞いた彩花は、もうここでこれ以上あがいたところで、生徒達が黙って解放してくれるわけがないと悟り、抗うのを止め、女子生徒の言葉に素直に従うことにした。

「それじゃあまず、脚をおもいきり開いてガニ股になってください」

女子生徒はあっけらかんとした口調で、ようやく大人しくなった彩花に最初の命令を告げた。

「分かったわ」

彩花は悔しさと恥ずかしさを堪えて答えるとゆっくりと腰を落として両脚を開いていった。

そして木の枝に縛られている両手がピンと伸びきると、彩花の両膝は直角に折れ曲がり、見事なガニ股ポーズを生徒達の前に披露したのだった。

「アハハ、先生のアソコ丸見えだわ」

「めっちゃセクシーだけど、なんか笑えるぅ」

「これじゃあ、ただの変態じゃん」

「先生、こんな大胆な恰好して恥ずかしくないわけ？」

「バカ、彩花ちゃんは露出狂の変態さんなんだぞ、俺達に恥ずかしい恰好見られて嬉しいんだよ！そうだよねぇ彩花ちゃん？」

生徒達は、全裸ガニ股ポーズをする美人女教師を思い思いの言葉で罵り、彩花の羞恥に歪み顔を見て楽しんだ。

それからスマホを持っている生徒達は、美人女教師が野外で晒す屈辱のセクシーポーズをあらゆる角度から撮影し、新たな脅しのネタとして保存していった。

彩花は今にも泣きそうな顔で、写真撮影する生徒達に訴えかけると、生徒達から「先生、笑顔をお願いしま～す！」と逆に無茶なお願いをされてしまい、屈辱の全裸ガニ股ポーズを披露しながら、必死に作り笑顔を浮かべて見せたのだった。

「お願い、もう許して・・・」

だんだん薄暗くなってゆく放課後の校庭の片隅では、三十人近い生徒達が一人の女教師を取り囲み、甚振り続けていた。一体いつになれば解放されるのか、彩花は何も分からないままま、ただ生徒達の要求に応え続けるしかなかった。

「先生、それじゃあそのまま腰を前後に振って見せてください」

女子生徒の一人はさらなる恥辱の命令を美人女教師に与えた。

「そんな・・・」

学校の校庭で全裸ガニ股ポーズを晒しているだけでも死ぬほど恥ずかしいのに、そのうえ腰を前後に振るなど彩花には考えられなかった。

「先生どうしたんです？できないんですか」

女子生徒は、全裸ガニ股ポーズをしている女教師の前に近づき、その美貌を見下ろしながら尋ねた。

「酷い子・・・」

彩花はポツリとそう呟いた後、ゆっくりと腰を前後に動かし始めたのだった。

「先生、何回言わせるんですか、笑顔ですよ、笑顔！」

女子生徒が、腰を振る彩花の顔を見下ろしながら告げると、彩花は一瞬唇を噛みしめた後、目の前で見下ろす女子生徒に向かって再び引きつった笑みを浮かべて見せた。

「フンっ、厭らしい女ね」

女子生徒は、彩花に向かって穿き捨てるように呟くと、屈辱の裸踊りを始めた美人女教師の前から離れていった。

全裸で両脚を大きく開いて腰を前後に振る彩花の姿は、目の前にいる大勢の生徒達に女教師の秘部をどうぞご覧下さいと言わんばかりの破廉恥極まりない踊りであった。

「先生、もっと腰を激しく振って見せてぇ！」

「ほら、笑顔が崩れちゃってますよ！」

「どうせならオッパイも振って見せてもらえませんかぁ！」

すっかり調子に乗った生徒達は次々と彩花に注文を投げ掛け、美人女教師の卑猥過ぎる裸踊りを見ながら盛り上がった。

彩花が激しく腰を振る度に、その両手を縛る木の枝が軋む音が響き、今にも折れてしまいそうな勢いだった。

「それじゃあ、そろそろ帰る？」

「わぁ本当だ、もうこんな時間になってるぅ、私この後、友達と約束あるんだった」

「俺も腹減ったから、もう帰るわ」

「そだねぇ、もう暗くなってきたし、みんなで帰りますか」

生徒達は互いの顔を見て頷き合った。

「先生、そういうことだから私達もう帰りますね」

生徒の一人が、裸踊りを続ける彩花に声を掛けると、校庭の隅の木に縛られた女教師を残して、それぞれの部室へと歩き始めた。

「ちょっと待ってぇ！私の手を解いてぇ！」

全裸のまま校庭に放置される恐れを感じた彩花は、生徒達に向かって大声で叫んだ。

「先生、そんなに大きな声出したら見つかっちゃいますよ！」

生徒達は「シッ～」と小さな声を発しながら人差し指を口元に当てて、彩花に静かにするように示した。

「こんなことしてアナタ達どうなるか分かってるの！みんな退学になるわよ！」

窮地に陥った彩花は、思い余ってキレそうになり、遠ざかってゆく生徒達を脅かした。

「先生、何をバカなこと言ってるんですか。私達をそんな目に遭わせて一番酷い想いをするのは先生の方なんですよ」

「私達は先生の恥ずかしい動画や写真を持っていることを忘れないで下さい！」

「そうだよ、俺なんてオカズ用に彩花ちゃんの恥ずかしい動画を一杯スマホに保存したもん」

「俺も！」

「先生がもし、私達のやったことを他の先生達に言ったら、私達は先生の恥ずかしい動画や写真をネットで世界中にばら撒きますからね！」

「そしたらもう先生の生きていく場所なんて何処にもなくなっちゃいますよ」

「だから先生、悪い事は言いませんから、もしも誰かに見つかった時には、適当に誤魔化しておいて下さい！」

「外から入って来た不審者に襲われたとか」

「それとも、一人でエッチな遊びをしてたらして手が解けなくなったとか」

「アハハ、それいいねぇ。その方が先生達も信じるかもよ」

生徒達は、それぞれのスマホに彩花の恥ずかしい弱みをたくさん保存した事ですっかり強気になり、もう誰一人として女教師をこのまま放課後の校庭に全裸放置して帰ることに躊躇いのある者はいなかった。

「お願い・・・そんなこと言わないで」

生徒達の冷酷な言葉の数々を浴びた彩花は、さっき一瞬だけ反撃を試みた勢いは完全に消え失せ、今にも泣きそうな顔で生徒達に懇願した。

「先生、明日の朝一で学校に来て、ちゃんと腕を解いてあげますから、そんなに悲しい顔しないで」

「そうそう、俺も明日早起きして、彩花ちゃんの所に飛んでくるからさ」

「だから、それまで誰にも見つからないように、ここでじっとしていて下さいね」

生徒達は最後にそう言い残すと、暗くなった校庭を急ぎ足で歩いて彩花の前から消えて行ってしまったのだった。

放課後の校庭の片隅に全裸のまま木に縛られて放置された女教師は、暗く染まっていく空の下でどうしようもない不安に襲われ、剥き出しの体を小刻みに震わせていた。

■海老沢薫ＢＬＯＧ

・・・最新作の出版情報や、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

https://ebisawakaoru.blog.2nt.com/

■そのほかＳＮＳ

https://x.com/ebisawa_K

https://www.instagram.com/kaoru_ebisawa/

https://www.pixiv.net/users/70200870

■海老沢薫Ｗｅｂ連載小説

『清楚な美人妻　彩２７歳　絵画モデル編』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=9281

『清純派女優　結衣２４歳－国民のペットへと堕ちていくヒロイン－』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18802

『清純派女優　結衣２４歳－女神の憂鬱－』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=26675

『女教師　玲奈２５歳－女性教諭の前代未聞の不祥事－』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=17186

『美人社長　里帆２６歳－若き女社長のプライドを砕く屈辱の契約－』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18885